

□奥沢康正先生を偲ぶ

真柳 誠

二月二四日、京都の猪飼先生より電話があり、奥沢先生がご逝去されたとの連絡をいただいた。あまりに突然だったので驚くしかなかった。それで『醫譚』に追悼文を寄稿いただきたいとのことだったが、まさかそんなこと想像すらしたことがなかった。

思い返してみると、拝眉を得たのは日文研の山田慶兒斑に参加するようになった一九九三年くらいのことだろう。当時から豊かな白いあごひげを蓄えた温顔が記憶にのこっている。ご専門の眼科以外にも多趣味というか骨董まで興味がおりで、亀岡の別荘にご案内いただいたときにはその量とバラエティに圧倒された。日文研の研究会に参加した中国の友人らと別荘に宿泊させていただいたこともあるし、亀岡が出身という丹波康頼を供養するため金輪寺にたてられた五輪塔まで先生の車でご案内いただいたこともある。

わたしは一九九六年に北里研究所から茨城大学に転籍し、その頃から龍谷大学大宮図書館写字台文庫の医薬古籍籍を整理して目録化する任もいただき、日文研をふくめ毎月のように上洛していた。また眼科関連の古籍を東京の古書店で購入

する依頼もあり、奥沢先生と会う機会はかなりあったように思う。なかでも記憶にのこるのは関東にも名が知られていたライブハウスの磔磔でお酒をご馳走いただき、もともとこの店は先生が音楽喫茶として始められたと伺ったことだった。眼科医でありながら古い酒蔵に着目し、音楽喫茶を開くとはなんという度量なのだろう。

そうした典型が先生のキノコ研究だった。全著作は医学童話も含めて数十におよぶかもしれないが、キノコ関連だけでも四、五点はある。とくに『冬虫夏草の文化誌』『きのこの語源・方言事典』『毒きのこ今昔』などは徹底してものごとを追求する先生の姿勢の白眉といえよう。よくもまーここまでと感嘆せざるをえない。冬虫夏草については中国本草の記述について質問を受け、いくつか助言させていただいた記憶もある。

日文研山田斑の共同研究論文集『歴史の中の病と医学』（一九九七）をいまひらいてみると、執筆者二一名のうち管見の範囲ですでに八名が鬼籍に入っていた。三〇年ほど前の論文集ゆえ当然といえようが、先生がそのひとりになられたことは本当に悲しい。ここに謹んで哀悼の意を捧げる。

（茨城大学）